



古代から続くみやま有明の恵みに感謝。

神様を送る清浄な場所とされた稲刈り後の田んぼで

歳神様を煙とともに空へお送りする神事「ほんげんぎょう」

「～新年の願いを炎に託して～」

書初めほんげんぎょう 火入れ体験

みやま市でもまだ数カ所の地域で実施されている「ほんげんぎょう」は、正月に家々にお迎えした歳神様を火で清めてお見送りし、一年の無病息災と五穀豊穡を祈る火祭りです。

また、新しい年の願を筆に込めて書く「書き初め」は、古くから「その年の心を整える行い」として大切に受け継がれてきました。

今回は、瀬高町長田地区の田んぼで行われる「ほんげんぎょう」の行事で、書き初めを行い、その作品をほんげんぎょうの「櫓へ」とお納めし、清めの炎とともに願いが天へ届けられます。

自分の想いを筆に託し、炎とともに新しい一年を祈る、今も残る日本の正月文化に触れる特別な体験はいかがですか？

プログラム

8時45分 受付開始

9時00分 説明・書き初め体験

10時00分 書き初めした作品をほんげんぎょうにて奉納

焼き芋・豚汁でほっこり交流タイム

11時00分 アンケート記入・終了

開催日 令和8年1月11日(日)

時間 9時00分スタート

(受付開始時8時45分より)

開催場所 上長田公民館・長田地区の田んぼ

参加料金 大人1000円・子ども500円

定員 定員15名(最少催行1名)

おもてなし 焼き芋・豚汁



くらし調う、みやま有明。

「ほんげんぎょう」は、鬼道に通じる鬼払い？ つきなみ旅連載コラム vol.16



ひみこは鬼道に長けていたそうですが、「鬼道」の本来の意味は漢民族（魏）から見た「自然と共存して生きる異教の祭祀祈禱」のことであります。日頃何気なく使う「祭祀」という言葉には、その意味が込められています。「祀」という字の「巳」は、蛇をお祀りする事で、稲作民においては水神である蛇が自然神の代表とされていました。鬼道の起源は、西北九州有明文化圏に稲作をもたらした苗族（ミャオ族）の風習と考えられ、それが江南「道教」へと発展深化したと考えられます。無病息災と五穀豊穡を祈る「ほんげんぎょう」には鬼（災厄）を追い払うご利益があるようで、鬼道と同じような意味があるのかも知れません。

みやまでは、書道や剣道、弓道など日本古来の技法と精神の伝承であり、道教由来の「道」の文化活動が盛んなのも、このあたりにルーツがあるのかも知れませんね。

ブランディングアドバイザー

福井 隆

東京農工大学大学院客員教授
地域生存支援LLP代表
「地域で生きる、希望をつくる」
事業化支援ファシリテーター

誇り高き地域の歴史と伝統

臼かぶり

場所／淀姫神社境内 みやま市高田町江浦町56 日時／1月11日午前11時頃

肌を刺すような寒空の1月、高田町江浦町の二の丸吉原地区で行われる『臼かぶり』を淀姫神社境内で見ることができます。五穀豊穡・無病息災を願って、大きな木臼を持ち上げ水をかぶりながら、自分の後方に豪快に投げ飛ばす姿は、圧巻！子供も含めた裸若集が次から次に、自主的に進み出て、相当重たい木臼を選び懸命に持ち上げる姿は迫力があり、する人、見る人みんなが応援のまなざしで笑顔になっていく絵も言われぬ空間です。見ているだけで、こちらも元気をもらえます。この神事は、一旦途切れていたそうですが20年ほど前に、みんなで復活させたとか。是非、続いてほしい神事です。



粥占い御試祭

場所／江浦八幡神社 みやま市高田町江浦742 日時／2月15日(日)

この伝統祭事は、粥に発生するカビの状態によって、その年の気象や農漁業等を予測します。前年に収穫された稲を元旦、神前にお供えし、そのお米を1月15日粥に炊きます。それを神殿で一ヶ月間安置し、神事お祓いをしてから蓋を開け、粥に発生したカビの色彩、形状、位置（方位）等を見ながら、その年の台風・大雨・地震等の気象情報や米・大麦・小麦・大豆・海の収穫等の良し悪しを判定します。藩政時代には、柳川藩に報告され、その年の政策を決めていました。宮司さんの理にかなった丁寧な解説を聞くにつれ、いかにこの地域が農漁業盛んで気象条件が重要だったか、そして先人たちが自然に畏敬の念を持って土地を守ってきたかが伺い知れる神事です。

